

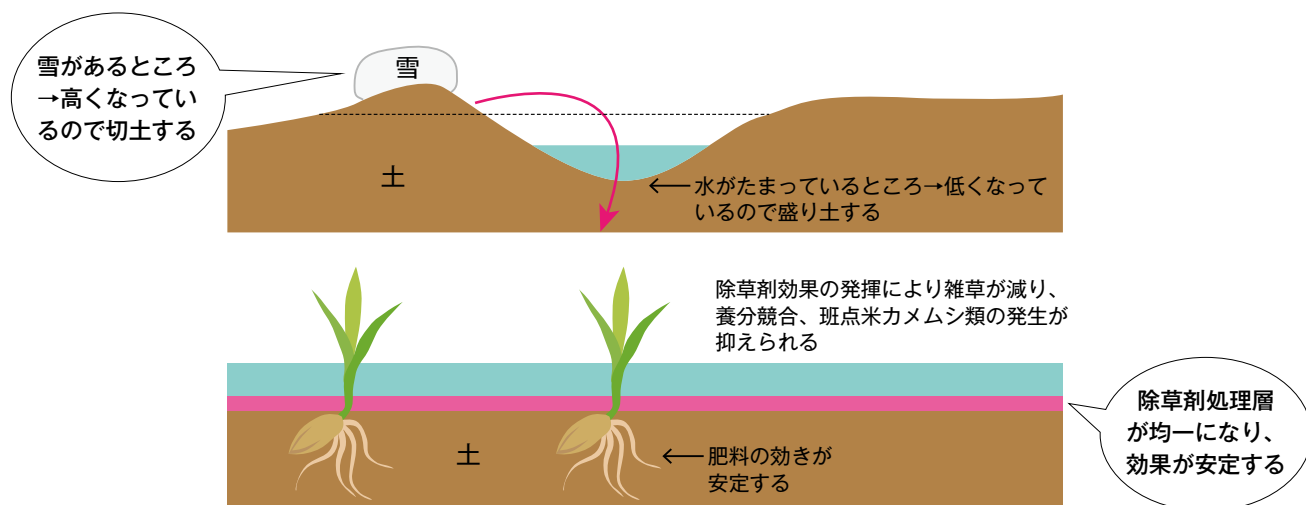
■稲づくりの土俵づくりは、田面の平均がポイント

今冬は比較的暖かい日が続き雪解けも進んでいます。ほ場の排水を促し、田面を乾かしましょう。また昨年の作業の影響により田面に凸凹のあるほ場では、高低差を確認し田面を均平にしましょう。

ほ場の高低差を少なくすると耕起や代かきが均一になります。田面が均一になると除草剤の効果が安定し、雑草を抑えることができ、雑草との養分競合や斑点米カメムシ類の被害を抑えることができます。

また、肥料の効果が安定し生育が均一になるというメリットもあります。

ほ場の高低差は雪解け時に確認しましょう。雪が残っているところは高くなっているので切土します、また水が溜まっているところは低くなっているので盛土しましょう。



■ケイ酸を投入しましょう

ケイ酸を施用することにより稲の茎葉が硬くなり、倒伏・病害・異常気象に強い稲に仕上がります。また、葉の厚みが増し、直立し受光体勢がよくなり光合成能力が向上する事から、デンプンの蓄積が増大し、登熟歩合向上や千粒重の増加が期待でき、多収、良食味生産に繋がります。高温時には、葉身からの蒸散が増えることで葉温上昇を抑え、稲体の消耗を減らすことができます。また、白未熟粒の発生軽減が期待できます。

稲が吸収するケイ酸は、土壌や用水、稲わらのすき込みに由来します。しかし、稲刈りにより持ち出される玄米や粃殻に含まれるケイ酸は、土壌改良資材を投入しない場合には年々、土壌中のケイ酸含有量は減少してしまいます。

管内で行なわれた土壌診断の結果では、80%以上のほ場でケイ酸不足の状態になっていました。天候、病害虫に負けない稲作りの為にケイ酸資材を積極的に投入しましょう。

主なケイ酸資材（土づくり肥料）

資 材 名	保 障 成 分 (%)	10 a あたり 施肥量(基肥)	備 考
お ば こ ロ マ ン 大 地	リンサン：5 苦 土：3 ケ イ 酸：15 アルカリ：25	60～80kg	20kg袋 ケイ酸エース70%配合 J A 秋田おばこ推奨商品
ケ イ 酸 加 里	加 里：20 苦 土：4 ケ イ 酸：34 ホ ウ 素：0.1	40～60kg	20kg袋 く溶性加里と可溶性ケ イ酸で効率よく吸収される

今春は低温が予想されています 適切な種子予措でばか苗病を防ぎましょう

今冬は、比較的暖かな日が多く例年に比べて積雪量も少なく消雪が進んでいます。しかし、気象庁発表の長期予報によると今年の春は低温傾向になると予想され、ばか苗病やその他の病害発生が心配されます。これから本格的な作業を迎えるにあたり、今一度病害虫を出さない管理の徹底をお願いします。

■ばか苗病対策はまず環境衛生から

前年度ばか苗病が発生した場合は、作業舎内に残っている粃殻や、粉じん等に菌が付着している恐れがあるため、適切な種子予措だけでなく、作業施設内の掃除も徹底しましょう。

- ① 周辺からのばか苗病の感染を防ぐため、種子予措を行う作業施設やその周辺から伝染源となる稲わら、粃殻、米ぬか、粉じん等を掃除し取り除きましょう。
- ② 消毒前の種子と消毒後の種子を同じパレットやシート等に置かないでください。また、消毒後の種子をのせるパレットやシート等は清潔なものを用意してください。
- ③ 種子予措に使う器具や容器は使用する前に洗浄し、汚れなどを落としましょう。また、前年度もみ枯細菌病にも悩まされた方は病原菌が付着している可能性がありますので洗浄と同時に器具の消毒を行いましょう。（消毒資材：イチバン 500～1,000倍で使用）
- ④ 薬剤効果安定のため、浸種時、催芽時は容器にフタをしてください。
- ⑤ 浸種、催芽で使用する器具や容器は品種や消毒方法が変わるごとに十分に洗浄してください。
- ⑥ 浸種時の循環はしないこと。
- ⑦ 無加温出芽（ベタ置き）の場合、出芽までの期間が長引くと発病が多くなりやすいため、被覆資材等による保温に努めてください。また出芽後の再被覆は行わないでください。





安心のネットワーク
NOSAI仙北から

農機具共済

稼動前に
※点検と
※加入で

《春期》加入運動実施中！
●1台当り2,000万円まで加入OK！
●新品価格までの加入が大事です。
ゆとりの農作業を…



■浸種と催芽は適温確保が最重要

薬剤を効かせるために

薬剤吹付種子は、浸種することで、吹き付けられた薬剤が溶け出し、種子に吸収されて初めて消毒されます。水温が低いと薬剤の効果が低下しますので、初めはお湯を使い、必ず水温15℃で浸種始めてください。

水量は種子 1 kg に対し水3.5ℓ程とし浸種開始から2日間は水を動かさずに静置します。

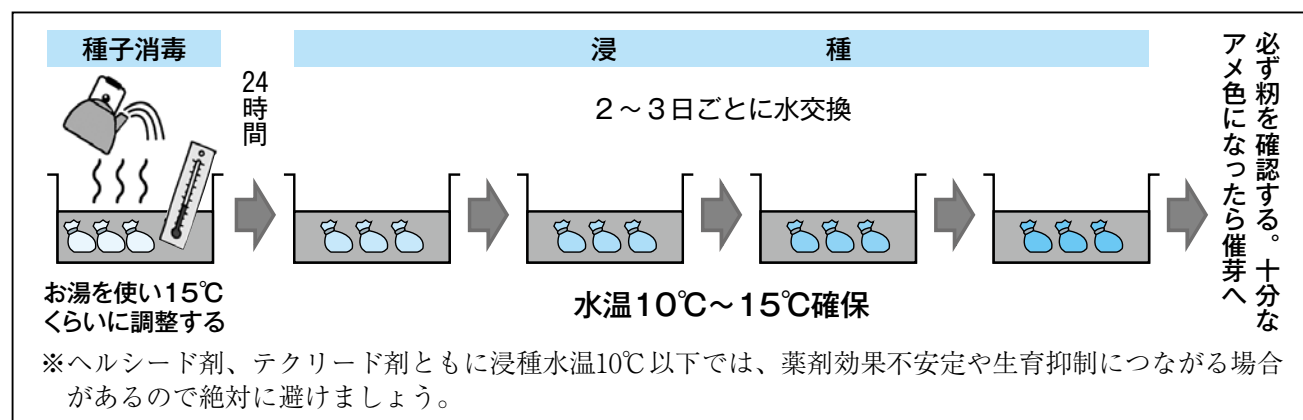
浸種開始後2日間は種子袋をゆすったり、水のかけ流し、循環や交換は行いません。

1回目の水交換後、水温は10℃～15℃を保ち、2～3日おきに水を交換します。浸種期間は浸種水温10℃の場合で6～10日間程度とし、水の交換は2～3回とします。水交換時には、必ず籾の状態を確認し、籾袋を上下入れ替えするなどして、均等に吸水させるようにします。十分に吸水をした籾は、胚が白く透けて見えるようになり、浸種終了の目安となります。

無消毒種子を消毒する場合は効果の高いテクリードCフロアブルを使用しましょう。

複数の品種や消毒方法の違う種子を同一の水槽で浸種、催芽しないでください。

上手な浸種方法



温湯消毒種子の注意点

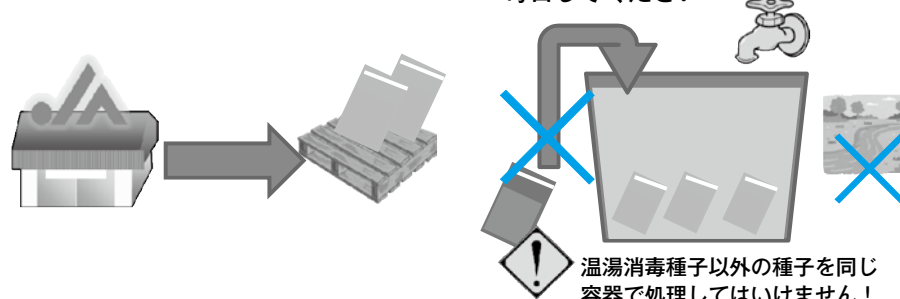
温湯消毒種子はお湯により殺菌が終了した無菌状態の種子なので、浸種後も清潔な環境に保つことが重要です。

河川水などは雑菌等がいるため、浸種、催芽に使用する水は水道水か井戸水を使い、水の量は種子量の2倍以上で行いましょう。また、消毒方法が違う種子を同じ容器で浸種しないでください。呼吸活動が活発なため、水は毎日交換し、水循環は絶対にしないでください。また、浸種水温は10～15℃の範囲で行いましょう。

芽の動きが早い傾向にあるため籾をよく確認しましょう。

①種子が届いたら清潔な場所で保管

②温湯消毒種子単独で行い、水交換は毎日してください

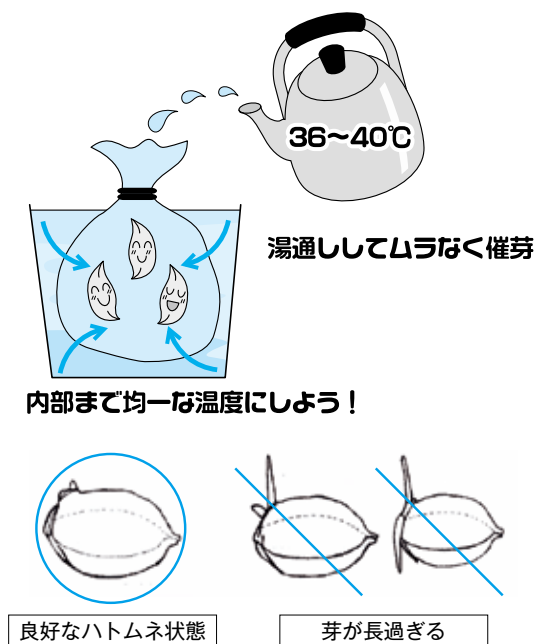


催芽時の注意点

催芽ははじめに、36℃から40℃のお湯で湯通しを行い、種子袋の内部まで均一な温度になるようにしましょう。その後、水温30℃で催芽を行います。催芽水温が高すぎるともみ枯細菌病などの病気にかかる危険が高まります。

温湯消毒種子を使用する場合は、催芽時にタフブロック剤を使用し防除効果を高めましょう。

芽の長さはハト胸程度を目安とします。芽が長くなると損傷が多くなり、播種量のばらつきや播きムラ、生育不揃いの原因となるので注意しましょう。



■いもち病は育苗期の防除で抑えます

本田におけるいもち病発生の主な原因は、育苗施設からの発病・感染苗の本田への持ち込みです。また、乾燥状態で冬を越した稲わら・籾殻も伝染源になります。

いもち病の発生を防ぐためには「耕種的防除」と「薬剤による防除」を組み合わせで行いましょう。

耕種的防除

- 育苗施設の近傍や施設内にある稲わら・籾殻は除去しましょう。
- 育苗施設内の通風不良、日照不足、被覆期間の過剰、過繁茂、田植えの遅延は発病を招きますので、田植時期を考慮した播種を行いましょう。

薬剤による防除

- 種子消毒は必ず行います。防除効果を高めるため、浸種水温が10℃～15℃になるよう努めましょう。
- 育苗期いもち防除は下表の薬剤で必ず実施し、育苗施設から本田への感染・発病苗の持ち込みを防ぎます。
- 嵐剤（50 g／箱）の床土混和又は播種時（覆土前）～1葉期展開前の散布処理は育苗期いもち防除と本田の葉いもち防除を兼ねます。

育苗期いもち防除剤

薬 剤 名	使 用 時 期	箱当たり使用量	備考
ベンレート水和剤	播種時～播種7日後頃	500倍液 500ml 1,000倍液 1,000ml	灌注
ビームゾル	緑化始期 (ベタ張り除去後すぐ)	500倍液 500ml	灌注
嵐 剤	床土混和または 播種時(覆土前)～1葉展開前	50 g	混和又は散布

※ビームゾルは使用時期が遅れたり、低温時に使用すると葉先が黄化する薬害を生じる。

※ベンレート水和剤の播種時処理、嵐剤の床土混和または播種時処理は、種子消毒に使用するタフブロック又はエコホープD J の防除効果を低下させるため体系処理は行わない。

※耐性菌対策のため嵐剤の50 g 処理は、採種ほがある地域と採種ほに隣接する地区では行わない。

育苗期防除と箱施用剤を組み合わせ、いもち病の発生を抑えましょう。